COLUMN　銅像となった偉人

♪柴刈り縄ない草鞋（わらべ）をつくり　親の手を助（す）け弟（おとと）を世話し
兄弟仲良く孝行つくす　手本は二宮金次郎♪

戦前よく歌われた文部省唱歌「二宮金次郎」の冒頭の一節である。戦前に教育を受けた人なら誰でもそらで歌える。当時の愛国主義の風潮に乗り、この唱歌とともに主人公・二宮金次郎は全国の小学校で教育上「人間として模範・理想」のモデルと称えられた。軍国主義が強まるにつれ、唱歌のみならず、全国の小学校校庭に銅（石）像も建設されるようになった。その数も増え続け２校にひとつの割合にまでなった。

ところが、敗戦で事態は一変した。しばらくするとこの金次郎像が学校から撤去され始めた。その背景には、「児童の教育方針に合わない」「子どもが働く姿を薦めることはできない」「戦時教育の名残り」「歩きながら本を読むのは危険」など、それまで黙っていた保護者たちからも批判的な声が聞かれたという。確かに、幼い子が家事を手伝うとか、歩きながら本を読むことには疑問が呈された。歩きながら本を読むなどは、今時の歩きスマホと同じである。かつて私が通った２つの小学校にも、それぞれ教職員室の前と校門を潜った正面に立派な金次郎像が建っていた。しかし、現在では二宮金次郎像は、ほとんどの小学校から姿を消してしまった。

人物像はかつて国家の偉人らを国民が挙って崇拝し、祀るために公に建造されたものである。今でも各地に戦前から残されている像がある。北大のクラーク博士像、仙台の伊達政宗像、上野の西郷隆盛像や、桂ヶ浜の坂本龍馬像などは、国民の多くの人々から敬われ知られている像である。

国内に限らず海外にも日本人の銅像は決して多くはないが、それでもタイ・アユタヤ日本人町の山田長政像や、意外なものでは生誕の地であるロシア・サハリンのポロナイスク市に建つ横綱大鵬像などがある。その中で日本人らしい存在感のある像は、17 世紀初頭に藩主伊達政宗の命により慶長遣欧使節団長として欧州へ派遣された支倉常長の像であろう。支倉の像は、メキシコ、キューバ、スペイン、イタリアの他に、帰路立ち寄ったフィリピンにもある。メキシコのアカプルコ海岸に海を眺めて建てられた、支倉常長の見上げるような像の前に初めて立った時、その存在感と意外な昂揚感に興奮さえ覚えたものである。そこは、支倉が使節団として最初に上陸した海岸だった。その後設置場所が二転三転し、今では海岸に整備された「日本広場」の一番目に付く場所に、向きを変え今度は海を背にして建っている。

普通人物像は、そのほとんどが故人となってから建立されるケースが多いが、当人たちは冥界から自らの像を見てどう思っているだろうか。

（エッセイスト　近藤 節夫）